

文献紹介

溝口常俊 編著

『名古屋の明治を歩く』

風媒社 2021年6月 157頁 1,600円＋税

歴史地理学会前会長でもある溝口常俊氏により、前著『名古屋の江戸を歩く』に続いて17名の執筆陣とともに2021年3月に著されたのが、本書である。前著刊行から間が無く、前著でも明治期についてある程度述べられていたため、どうしても内容に重複があるのではとの評者の想定は、完全に吹き飛ばされた。東京、大阪などと比べ、明治期についての著作が多いといえない現在の名古屋市の一帯をめぐる、多様な執筆陣による、これまで広く知られてないであろう記述が収録されている。

本書の内容は、以下の通りである。こうした章構成に加えて、例えば第4章は計11節で構成される。

- 第1章 城下町から工業都市へ
一地図でたどるその変遷—
- 第2章 明治のまちをゆく
- 第3章 明治のまち物語
- 第4章 名古屋の歴史とルーツ

第1章は、明治19(1886)年刊「名古屋明細地図」と明治43(1910)年刊「名古屋市実測図」から、この間に同市に併合される熱田町を含めた明治期「名古屋市」の全体像を描き出す。図面全面を見開きで示し、注目すべき地区については拡大図と説明を加えて、両時期の「名古屋市」の特記される施設の立地などを示す。前者の図については改訂版とみられる明治26(1893)年刊の図も第4章で部分的に示され、比較により、例えば名古屋駅の設置構想から、開駅後のその周囲の変化もうかがい知れる。また、現在の名古屋市の都心部には、それまでの城下町ならではの施設に代わり、近代を象徴する諸施設が次々と設けられていったことが示される。

第2章では、今も残る建築物、現在では失われた建築物の紹介を中心に、明治期の「名古屋市」

を紙上散策する。とくに当時の「碁盤割」の繁華街や熱田には、今となっては「図絵」などでしか見ることのできない賑わいがみられた。その一枚一枚に、人々の活動がより詳細に描かれている。

第3章では、「名古屋市」の都市基盤がいかに形づくられたのかを確認する。例えば、明治21(1888)年まで名古屋区長を務めた吉田禄在は、官営鉄道名古屋駅を誘致し、同市発展の基礎をつくったと評価されやすいが、必ずしも同氏による誘致が決定打となったと言えないことが示される。また、名古屋城が明治期に陸軍の拠点となっていたことも、鉄道整備に関わったことが挙げられる。鉄道整備と並行して、明治期には水運も期待され、堀川の上流に黒川や新木津用水が開削されて、名古屋と犬山とが結ばれた。さらに、牛馬車などが様々な産業の発達に寄与したことに、光が当てられる。

また第4章では、「名古屋市」の近代化をめぐる様々な説明が再検討される。ここでは、これまで吉田禄在の評価が、その在任中は大きく揺れ続けたことが示される。そして、明治期「名古屋市」には各種学校が開校し、その存在が名古屋の文芸の発展にも寄与した。ほかに、拡張・延長された広小路には百貨店が立地し、明治42(1909)年の第10回関西府県連合共進会においては、会場に現在の鶴舞公園が充てられ、そこに向けての道路や路面電車の整備があった。大戦中に焦土化したことでの都市計画が注目されやすい名古屋市の都心部の骨格の多くが、すでに明治期に形づくられていたことが強調される。

ほかに、各章間にはトピックが挿入される。「きしめん」のくだりなどは、当時と現在とを一気に近づける。明治期の「コレラ」対応は、先の見えないコロナ禍にある今見て笑えない実情を示す。特筆されるのは遊郭—現在では都心部となる大須の南側に存在した旭郭などをめぐる動きで、ここでは勇気ある娼妓により廃娼運動が起こされ、その運動が名古屋在住宣教師によって支えられた。その動きは日本各地に広がり、旭郭も最終的に、当時としては名古屋駅のはるか西の中村に移転されることになる。

このように多彩な内容の本著であるが、強いて言えば、各旧地名が現在の名古屋市のどこに相当するのか、面倒ながら多めに示してもらいたかった。前著で示されたように、名古屋市は都心部を中心に、昭和37（1962）年の「住居表示に関する法律」以降、他都市と比べても大きく旧地名が廃された。評者は、武平町など名だたる旧地名は

よくても、当然のように登場する旧地名に、現在のどこに相当するのか確認が必要なものが散見され、自身の不勉強を恥じた。地図の存在は偉大で、第1章で示された地図などを活用して、各章で登場する地区や場所をまとめて示しておく手もあったであろう。

（山元貴継）